

牛をつないだ樁の木

新美南吉

青空文庫

山の中の道のかたわらに、椿の若木がありました。牛曳きの利

助さんは、それに牛をつなぎました。

人力曳きの海蔵さんも、椿の根本へ人力車をおきました。

人力車は牛ではないから、つないでおかなくてもよかつたのです。

そこで、利助さんと海蔵さんは、水をのみに山の中にはいつてゆきました。道から一町ばかり山にわけいったところに、清くつめたい清水がいつも湧いていたのであります。

ふたり
二人はかわりばんこに、泉のふちの、しだやぜんまいの上に両
ようて
手をつき、腹ばいになり、つめたい水みずの匂においをかぎながら、鹿
のように水みずをのみました。はらの中なかが、ごぼごぼいうほどのみま
した。

やま なか
山の中では、もう春はる蟬ぜみが鳴ないていました。

「ああ、あれがもう鳴なき出だしたな。あれをきくと暑あつくなるて。」
と、海蔵かいぞうさんが、まんじゅう笠かさをかむりながらいいました。

「これからまたこの清しみず水を、ゆききのたんびに飲のませてもらうこ
とだて。」

と、利助りすけさんは、水みずをのんで汗あせが出でたので、手拭てぬぐいでふきふきい
いました。

「もうちと、道みちに近ちかいとええがの才。」

と海蔵かいぞうさんがいいました。

「まったくだて。」

と、利助りすけさんが答こたえました。この水みずをのんだあとでは、誰だれでも

そんなことを挨拶あいさつのようにいいあうのがつねでした。

ふたりふたりつばき二人ふたりが椿つばきのところへもどつて来くると、そこに自じてんしや転車てんしゃをとめて、

ひとりひとりおとこひと一人ひとりの男おとこの人が立たっていました。その頃ころは自じてんしや転車てんしゃが日にっぽん本ほんには

いつて来きたばかりのじぶんで、自じてんしや転車てんしゃを持もっている人ひとは、田舎いなか

では旦那衆だんなしゆうにきまつていました。

誰だれだろう。」

と、利助りすけさんが、おどおどしていいました。

「区長さんかも知れん。」

と、海蔵さんがいいました。そばに来てみると、それはこの附近の土地を持っている、町の年とつた地主であることがわかりました。そして、も一つわかったことは、地主がかんかんに怒っていることでした。

「やいやい、この牛は誰の牛だ。」

と、地主は二人をみると、どなりつけました。その牛は利助さんの牛でありました。

「わしの牛だかのイ。」

「てめえの牛？ これを見よ。椿の葉をみんな喰つてすつかり坊主にしてしまったに。」

ふたり
二人が、牛をつないだ椿の木を見ると、それは自転車をもつ
た地主がいったとおりでありました。若い椿の、柔らかい葉はす
っかりむしりとられて、みすばらしい杖のようなものが立っ
ただけでした。

利助さんは、とんだことになったと思つて、顔をまっかにしな
がら、あわてて木から綱をときました。そして申しわけに、牛の
首つたまを、手綱でぴしりと打ちました。

しかし、そんなことぐらいでは、地主はゆるしてくれませんで
した。地主は大人の利助さんを、まるで子供を叱るように、さん
ざん叱りとばしました。そして自転車のサドルをパンパン叩き
ながら、こういいました。

「さあ、何でもかんでも、もとのように葉をつけてしめせ。」
これは無理なことでありました。そこで人力曳きの海蔵さんも、まんじゅう笠をぬいで、利助さんのためにあやまつてやりました。

「まあまあ、こんどだけはかにしてやつとくんやす。利助さまも、まさか牛が椿を喰つてしまふとは知らずにつないだことだで。」

そこでようやくやく地主は、はらのむしがおさまりました。けれど、あまりどなりちらしたので、体がふるえるとみえて、二、三べん自転車に乗りそこね、それからうまくのつて、行ってしまいました。した。

利助さんと海蔵さんは、村の方へ歩きだしました。けれども

はなし
う話をしませんでした。おとなおとなしか
情けないことだろうと、大人が大人に叱りとばされるというのは、
きも
気持ちをよくんでやりました。じんりきひかいぞう
海蔵さんは、利助さんの

「もうちつと、あの清水が道に近いとええだかの才。」

と、とうとう海蔵さんが言いました。

「まっただで。」

と、利助さんが答えました。

二

かいぞう
海蔵さんがじんりきひ
人力曳きのたまり場へ来ると、いどほ
井戸掘りの新しんご

五郎さんがいました。人力曳きのたまり場といつても、村の

街道にそつた駄菓子屋のことでありました。そこで井戸掘りの

新五郎さんは、油菓子をかじりながら、つまらぬ話を大きな

声でしていました。井戸の底から、外にいる人にむかつて話をす

るために、井戸新さんの声が大きくなつてしまつたのであります。

「井戸つてもなア、いつたいいくらくらいで掘れるもんかい、井

戸新さ。」

と、海蔵さんは、じぶんも駄菓子箱から油菓子を一本つまみ

だしながらききました。

井戸新さんは、人足がいくらいくら、井戸囲いの土管がいく

らいくら、土管のつぎめを埋めるセメントがいくらと、こまかく

説明^{せつめい}して、

「先^まず、ふつうの井戸^{いど}なら、三十円^{えん}もあればできるな。」
と、いいました。

「ほ才、三十円^{えん}な。」

と、海蔵^{かいぞう}さんは、眼^めをまるくしました。それからしばらく、油^{あぶら}菓^{くわ}子をぼりぼりかじっていましたが、

「しんたのむねを下^おりたところに掘^ほったら、水^{みず}がで^でるだろうか
ア。」

と、ききました。それは、利助^{りすけ}さんが牛^{うし}をつないだ椿^{つばき}の木^きのあたりのことでありました。

「うん、あそこなら、出^でようて、前^{まえ}の山^{やま}で清^{しみず}水^{みず}が湧^わくくらいだか

ら、あの下なら水は出ようが、あんなところへ井戸を掘って何にするや。」

と、井戸新さんがききました。

「うん、ちつとわけがあるだて。」

と、答えたきり、海蔵さんはそのわけをいいませんでした。

海蔵さんは、からの人力車をひきながら家に帰ってゆくと、

「三十円な。……三十円か。」

と、何度もつぶやいたのでありました。

海蔵さんは藪をうしろにした小さい藁屋に、年とつたお母さんと二人きりで住んでいました。二人は百姓仕事をし、暇な

ときには海蔵かいぞうさんが、人力車じんりきしゃを曳ひきに出ていたのであります。

夕飯ゆうはんのときに二人ふたりは、その日ひにあつたことを話しあうのが、

たのしみでありました。年としとつたお母かあさんは隣となりにわとりきょうの鶏けいが今日けふはじめ

て卵たまごをうんだが、それはおかしいくらい小ちいさかつたこと、背戸せどの

柵ひいらぎの木きに蜂はちが巣すをかけるつもりか、昨日きのうも今日きょうも様子ようすを見みに来きた

が、あんなところに蜂はちの巣すをかけられては、味噌部屋みそべやへ味噌みそをと

りにゆくときにあぶなくてしようがないということを話しはなしました。

海蔵かいぞうさんは、水みずをのみについている間あいだに利助りすけさんの牛うしが椿つばきの

葉はを喰くってしまったことを話しはなして、

「あその道みちばたに井戸いどがあつたら、いいだろにのオ。」と、い

いました。

「そりや、道みちぼたにあつたら、みんながたすかる。」

と、いつて、お母かあさんは、あの道みちの暑あつい日盛りに通とおる人々ひとびとをか

ぞえあげました。大野おおのの町まちから車くるまをひいて来る油あぶら売り、半田はんたの

町まちから大野おおのの町まちへ通とおる飛脚屋ひきやくや、村むらから半田はんたの町まちへかけてゆく

らうやとみ羅宇屋らうやの富とみさん、そのほか沢たく山さんの荷馬車にばしや曳ひき、牛車ぎゆうしや曳ひき、人

力りき曳ひき、遍路へんろさん、乞食こじき、学校がっこう生徒せいとなどをかぞえあげました。

これらの人ひとののどがちようどしんたのむねあたりで乾かわかぬわけに

はいきません。

「だで、道みちのわきに井戸いどがあつたら、どんなにかみんながたすか

る。」

と、お母かあさんは話はなしをむすびました。

三十円えんくらいで、その井戸いどが掘れるほということを、海蔵かいぞうさんが話はなしました。

「うちのびんぼうような貧乏人にんにや、三十円えんといや大たいした金かねで眼めがまうが、利助りすけさんとこのなりきんような成金にんにとつちや、三十円えんばかりは何なんでもあるまい。」

と、お母かあさんはいいました。海蔵かいぞうさんは、せんだつて利助りすけさんが、山林さんりんでたいそうなお金かねを儲もけたもうそうなきいたことをおもいだしました。

ひと風呂ふろあびてから、海蔵かいぞうさんは牛車ぎゆうしやひ曳ひきの利助りすけさんの家いえへ出でかけました。

うしろ山やまで、ほ才ふくろうと梟うなが鳴ないていて、崖がけの上うえの仁左にざ工門もんさ

んの家では、念仏講があるのか、障子にあかりがさし、木の魚の音が、崖の下のみちまでこぼれていました。もう夜でありました。行つてみると、働き者の利助さんは、まだ牛小屋の中くらやみで、ごそごそと何かしていました。

「えらい精が出るのオ。」

と、海蔵さんがいいました。

「なに、あれから二へん半田まで通つてのオ、ちよつとおくれただてや。」

といいながら、牛の腹の下をくぐつて利助さんが出て来ました。

二人が縁ばなに腰をかけると、海蔵さんが、

「なに、きょうのしんたのむねのことだがのオ。」

と、話^{はな}しはじめました。

「あの道^{みち}ばたに井戸^{いど}を一つ掘^ほつたら、みんながたすかると思^{おも}うがの才。」

と、海蔵^{かいぞう}さんがもちかけました。

「そりや、たすかるの才。」

と、利助^{りすけ}さんがうけました。

「牛^{うし}が椿^{つばき}の葉^はをくつちまうまで知^しらんどつたのは、清^{しみず}水^{みづ}が道^{みち}から遠^{とお}すぎるからだの才。」

「そりや、そうだの才。」

「三十円^{えん}ありや、あそこに井戸^{いど}がひとつ掘^ほれるだかの才。」

「ほ才、三十円^{えん}の才。」

「ああ、三十円えんありやええだけな。」

「三十円えんありやのオ。」

こんなふうにいっていても、いつこう利助りすけさんが、こちらの心こころをくみとつてくれないので、海蔵かいぞうさんは、はつきりいつてみました。

「それだけ、利助りすけさ、ふんぱつしてくれないか工。きけば、お前まえ、だいぶ山林さんりんでもうかつたそうだが。」

利助りすけさんは、いままで調子ちょうしよくしゃべっていましたが、きゆうに黙だまってしまいました。そして、じぶんのほつぺたをつねっていました。

「どうだ工、利助りすけさ。」

と、海蔵かいぞうさんは、しばらくして答こたえをうながしました。

それでも利助りすけさんは、岩いわのように黙だまっていました。どうやら、こんな話はなしは利助りすけさんには面白おもしろくなさそうでした。

「三十円えんで、できるげなのオ。」

と、また海蔵かいぞうさんがいました。

「その三十円えんをどうしておれが出だすのかエ。おれだけがその水みずをのむなら話はなしがわかるが、ほかのもんもみんなのむ井戸いどに、どうしておれが金かねを出だすのか、そこがおれにはよくのみこめんがのオ。」

と、やがて利助りすけさんはいいました。

海蔵かいぞうさんは、人々ひとびとのためだということを、いろいろと説とき

しましたが、どうしても利助りすけさんには「のみこめ」ませんでした。

しまいには利助りすけさんは、もうこんな話はなしはいやだというように、

「おほか、めしのしたくしろよ。おれ、腹はらがへつとるで。」

と、家いえの中なかへむかつてどなりました。

海蔵かいぞうさんは腰こしをあげました。利助りすけさんが、夜よるおそくまでせつ

せと働はたらくのは、じぶんだけのためだということがよくわかったのです。

ひとりで夜よみちを歩あるきながら、海蔵かいぞうさんは思おもいました。――

こりや、ひとにたよつていちやだめだ、じぶんの力ちからでしなけりや、と。

たびひと 旅の人や、まち 町へゆく人は、しんたのむねのしたつばききの下の椿の木に、さいせ 賽
 んばこ 錢箱のようなものが吊つてあるのを見ました。それには札
 がついていて、こう書いてありました。

「ここに井戸を掘つて旅の人にのんでもらおうと思ひます。志のある方は一銭でも五厘でも喜捨して下さい。」

これは海蔵さんのしわざでありました。それがしようこに、それから五、六日のち、海蔵さんは、つばききのむきむき向かいあつた崖の上にはらばいになつて、えにしだの下から首つたまだけ出し、人々の喜捨のしようを見ていました。

やがて半田の町の方からお婆さんがひとり、うばぐるま 乳母車を押して

きました。花はなを売うつて帰かえるところでしょう。お婆ばあさんは箱はこに目めをとめて、しばらく札ふだをながめていました。しかし、お婆ばあさんは字じを読よんだのではなかつたのです。なぜなら、こんなひとりごとをいいました。

「地蔵じぞうさんなにも何もなにないのに、なんでこんなところに賽銭箱さいせんばこがあるのじやろ。」そしてお婆ばあさんは行いつてしまいました。

海蔵かいぞうさんは、右みぎて手にのせていたあごを、左ひだりて手にのせかえました。

こんどは村むらの方ほうから、しりはしよりした、がにまたのお爺じいさんがやつて来きました。「庄しょう平へいさんのじいさんだ。あの爺じいさんは昔むかしの人間にんげんでも、字じが読よめるはずだ。」と、海蔵かいぞうさんはつぶや

きました。

お爺じいさんは箱はこに眼めをとめました。そして「なにになに。」といながら、腰こしをのばして札ふだを読みはじめました。読よんでしまうと、「なアるほど、ふふウン、なアるほど。」と、ひどく感かん心しんしました。そして、懐ふところの中をさぐりだしたので、これは喜き捨しゃしてくれらるなど思おもっている、とり出だしたのは古ふるくさい蓑たばこい入いれでした。お爺じいさんは椿つばきの根元ねもとでいっぷくすって行いってしまいました。

海かい蔵ぞうさんは起おきあがって、椿つばきの木きの方ほうへすべりおりました。箱はこを手てにとつて、ふってみました。何なんの手てごたえもないのでした。

がっかりして海かい蔵ぞうさんは、ふうツと、といきをもらしました。

「けつきよく、ひとは頼りにならんとわかった。いよいよこうなつたら、おれひとりの力でやりとげるのだ。」

といいながら、海蔵さんは、しんたのむねをのぼって行きまし

四

つぎの日、大野の町へ客を送つてきた海蔵さんが、村の茶店にはいつていきました。そこは、村の人力曳きたちが一仕事して来ると、次のお客を待ちながら、憩んでいる場所になつていたのでした。その日も、海蔵さんよりさきに三人の人力曳き

が、茶店ちやみせの中に憩やすんでいました。

店みせにはいつて来た海蔵かいぞうさんは、いつものように、駄菓子箱だがしほこの
 ならんだ台だいのうしろに仰向けあおむに寝ころがってうっかり油菓子あぶらがしを
 ひとつ摘つまんでしまいました。人力じんりきひ曳きたちは、お客きやくを待つてい
 るあいだ、することがないので、つい、駄菓子箱だがしほこのふたをあけて、
 油菓子あぶらがしや、げんこつや、ぺこしやんという飴あめや、やきするめや
 餡あんつぼなどをつまむのが癖くせになっていました。海蔵かいぞうさんもまた
 そうでした。

しかし海蔵かいぞうさんは、今いま、つまんだ油菓子あぶらがしをまたもとの箱はこに
 入れてしまいました。

見ていた仲間なかまの源げんさんが、

「どうしたただや、海蔵かいぞうさ。あの油菓子あぶらがしは鼠ねずみの小便しょうべんでもか
かつておるだかや。」

と、いきました。

海蔵かいぞうさんは顔かおをあかくしながら、

「ううん、そういうわけじゃねえけれど、きようはあまり喰たべた
くないだがや。」

と、答こたえました。

「へへエ。いっこう顔色かおいろも悪わるくないようだが、それでどこか悪わる
いだかや。」

と、源げんさんがいきました。

しばらくして源げんさんは、ガラス壺つぼから金平糖こんぺいとうを一掴ひとつかみとり

出すと、そのうちの一つをほおいと上に投げあげ、口でぱくりと受けとめました。そして、

「どうだや、海蔵さ。これをやらんかや。」

といいました。海蔵さんは、昨日まではよく源さんと、それをやったものでした。二人で競争をやつて、受けそこなつた数のすくないものが、相手に別の菓子を買わせたりしたものでした。そして海蔵さんは、この芸当ではほかのどの人力曳きにも負けませんでした。

しかし、きようは海蔵さんはいいました。

「朝から奥歯がやめやがつてな、甘いものはたべられんのだてや

。」

「そうかや、せいじや、由^{よし}さ、やろう。」

といつて、源^{げん}さんは由^{よし}さんと、それをはじめました。

ふたり 二人は色^{いろ}とりどりの金平糖^{こんぺいとう}を、天^{てん}井^{じょう}に向^むかつて投^なげあげ

てはそれを口^{くち}でとめようとしましたが、うまく口^{くち}にはいるときも

あれば、鼻^{はな}にあたったり、たばこぼんの灰^{はい}の中^{なか}にはいたりする

こともありました。

海^{かい}蔵^{ぞう}さんは、じぶんがするなら、ひとつもそらしはしないの

だかなあ、と思^{おも}いながら見^みていました。あまり源^{げん}さんと由^{よし}さんが

落^おとしてばかりいると、「よし、おれがひとつやって見^みせてやる

かい。」といつて出^でたくなるのでしたが、それをがまんしていま

した。これはたいへんつらいことでありました。

はやく、お客きやくがくればいいのになあ、と海蔵かいぞうさんは眼めをほそめて明あかるい道みちの方ほうを見ていました。しかしお客きやくよりさきに、茶ちやみ店せのおかみさんが、焼やきたてのほかほかの大餡おおあんまき巻まきをつくつてあらわれました。

人力じんりきひ曳ひきたちは、大おおよろこびで、一本ほんずつとりました。海蔵かいぞさんもがまんできなくなつて、手てが少すこしうごきだしましたが、やつとのことでおさえました。

「海蔵かいぞうさ、どうしたじや。一銭せんもつかわんで、ごつそりためておいて、大おおきな倉くらでもたてるつもりかや。」
と、源げんさんがいいました。

海蔵かいぞうさんは苦くるしそうに笑わらつて、外そとへ出でてゆきました。そして、

溝みぞのふちで、かやつり草ぐさを折おつて、蛙かえるをつつていました。

海蔵かいぞうさんの胸むねの中うちには、拳骨げんこつのように固かたい決心けっしんがあつたのです。今いままでお菓子かしにつかつたお金かねを、これからは使つかわずにためておいて、しんたのむねの下したに、人々ひとびとのための井戸いどを掘ほろうというのでありました。

海蔵かいぞうさんは、腹はらも齒はもいたくありませんでした。のどから手てが出るでほど、お菓子かしはたべたかつたのでした。しかし、井戸いどをつくるために、今いままでの習しゅう慣かんをあらためたのでありました。

五

それから二年たちました。

牛が葉をたべてしまった椿にも、花が三つ四つ咲いたじぶんの
 或る日、海蔵さんは半田の町に住んでいる地主の家へやってい
 きました。

海蔵さんは、もう二ヶ月ほどまえから、たびたびこの家へ来
 たのでした。井戸を掘るお金はだいたいできたのですが、いざと
 なって地主が、そこに井戸を掘ることをしようちしてくれないの
 で、何度も頼みに来たのでした。その地主というのは、牛を椿に
 つないだ利助さんを、さんざん叱つたあの老人だったのです。
 海蔵さんが門をはいったとき、家の中から、ひえつというひ
 どいしやつくりの音がきこえて来ました。

たずねて見ると、一昨日から地主の老人は、しやつくりがとまらないので、すつかり体がよわつて、床についているということでした。それで、海蔵さんはお見舞いに枕もとまできました。

老人は、ふとんを波うたせて、しやつくりをしていました。

そして、海蔵さんの顔を見ると、

「いや、何度お前が頼みにきても、わしは井戸を掘らせん。しやつくりがもうあと一日つづくと、わしが死ぬそうだが、死んでも

そいつは許さぬ。」

と、がんこにいいました。

海蔵さんは、こんな死にかかった人と争つてもしかたがない

とおも
 と思つて、しやつくりにきくおまじないは、茶わんに箸はしを一本ほんの
 せておいて、ひといきみずに水をのんでしまうことだと教おしえてやりま
 した。

もん
 門でを出でようとすると、老人ろうじんの息子むすこさんが、海蔵かいぞうさんのあと
 を追おつてきて、

「うちの親父おやじは、がんこでしょうがないのですよ。そのうち、私わたし
 の代だいになりますから、そしたら私わたしがあなたの井戸いどを掘ほることを承し
 承ようち知ちしてあげましょう。」

といいました。

かいぞう
 海蔵かいぞうさんは喜よろこびました。あの様子ようすでは、もうあの老人ろうじんは、

あと二、三日にちで死しぬに違ちがいない。そうすれば、あの息子むすこがあとを

ついで、井戸いどを掘ほらせてくれる、これはうまいと思おもいました。

その夜よる、夕飯ゆうはんのとき、海蔵かいぞうさんは年としとつたお母かあさんに、こ

う話はなしました。

「あのがんこ者もんの親父おやじが死しねば、息子むすこが井戸いどを掘ほらせてくれるそ

うだかの才さい。だが、ありや、もう二、三日にちで死しぬからええて。」

すると、お母かあさんはいいました。

「お前まえは、じぶんの仕事しごとのことばかり考かんえていて、悪わるい心こころになつ

ただな。人ひとの死しぬのを待まちのぞんでいるのは悪わるいことだぞや。」

海蔵かいぞうさんは、とむねをつかれたような気きがしました。お母かあさ

んのいうとおりだつたのです。

次つぎの朝あさ早く、海蔵かいぞうさんは、また地主じぬしの家いえへ出でかけていきまし

た。門もんをはいると、昨日きのうより力ちからのない、ひきつるようなしやつくりの声こえが聞きこえて来きました。だいぶ地主じぬしの体からだが弱よわつたことがわかりました。

「あんたは、また来きましたね。親父おやじはまだ生い生きていますよ。」
と、出でて来きた息子むすこさんがいいました。

「いえ、わしは、親父おやじさんが生い生きておいでのうちに、ぜひおあいしたいので。」

と、海蔵かいぞうさんはいいました。

老ろうじん人はやつれて寝ねていました。海蔵かいぞうさんは枕まくらもとに両手りょうてをついて、

「わしは、あやまりに参まいりました。昨日きのう、わしはここから帰かえると

き、息子むすこさんから、あなたが死しねば息子むすこさんが井戸いどを許ゆるしてくれ
 るときいて、悪い心わるこころになりました。もうじき、あなたが死しぬから
 いいなどと、恐おそろしいことを平気へいきで思おもっていました。つまり、わ
 しはじぶんの井戸いどのことばかり考かんがえて、あなたの死しぬことを待ま
 ねがうというような、鬼おににもひどしい心こころになりました。そこで、
 わしは、あやまりに参まいりました。井戸いどのことは、もうお願ねがいしま
 せん。またどこか、ほかの場所ばしょをさがすとします。ですから、あ
 なたはどうぞ、死しなないで下ください。「
 と、いいました。

老人ろうじんは黙だまってきいていました。それから長いあいだ黙だまって海か
いぞう蔵ぞうさんの顔かおを見み上げていました。

「お前まえさんは、感かん心しんなおひとじや。」

と、老ろう人じんはやつと口くちを切きつていいました。

「お前まえさんは、心こころのええおひとじや、わしは長ながい生しょう涯がいじぶんの慾よくばかりで、ひとのことなどちつとも思おもわずに生いきて来きたが、いまはじめてお前まえさんのりっぱな心こころにうごかされた。お前まえさんのような人ひとは、いまどき珍めづらしい。それじや、あそこへ井い戸どを掘ほらしてあげよう。どんな井い戸どでも掘ほりなさい。もし掘ほつて水みずが出でなかつたら、どこにでもお前まえさんの好すきなところに掘ほらしてあげよう。あのへんは、みな、わしの土地とちだから。うん、そうして、井い戸どを掘ほる費用ひようがたりなかつたら、いくらでもわしが出だしてあげよう。わしは明日あしたにも死しぬかも知しれんから、このことを遺ゆい言ごんしておい

てあげよう。」

海蔵かいぞうさんは、思いおもがけない言葉ことばをきいて、返事へんじのしようもありませんでした。だが、死ぬしまえに、この一人ひとりの慾よくばりの老人ろうじんが、よい心こころになつたのは、海蔵かいぞうさんにもうれしいことでありました。

六

しんたのむねから打ちあげられて、少すこしくもつた空そらで花火はなびがはじけたのは、春はるも末すえに近いころの昼ひるでした。

村むらの方ほうから行ぎょう列れつが、しんたのむねを下おりて来きました。行ぎょう

列れつの先頭せんとうには黒くろい服ふく、黒くろと黄きの帽子ぼうしをかむつた兵士へいしが一人ひとりいました。それが海蔵かいぞうさんでありました。

しんたのむねを下おりたところに、かたがわには椿つばきの木きがありました。今花いまはなは散ちつて、浅あさみどり緑ろくの柔やわらかい若葉わかばになつていました。もういつぼうには、崖がけをすこしえぐりつつ、そこに新あたらしい井戸いどができていました。

そこまで来くると、行ぎょう列れつがとまつてしまいました。先頭せんとうの海蔵かいぞうさんがとまつたからです。学がっこう校こうかえりの小ちいさい子供こどもが二人ふたり、井戸いどから水みずを汲くんで、のどをならしながら、美うつくしい水みずをのんでいました。海蔵かいぞうさんは、それをにこにこしながら見ていました。

「おれも、いっぱいのんで行こうか。」

子供たちがすむと、海蔵さんはそういつて、井戸のところへ

行きました。

中をのぞくと、新しい井戸に、新しい清水がゆたかに湧いてい

ました。ちようど、そのように、海蔵さんの心の中にも、よろ

こびが湧いていました。

海蔵さんは、汲んでうまそうにのみました。

「わしはもう、思いのこすことはないがや。こんな小さな仕事だ

が、人のためになることを残すことができたからの才。」

と、海蔵さんは誰でも、とつつかまえていたい気持ちでした。

しかし、そんなことはいわないで、ただにこにこしながら、町の

方へ坂をのぼって行きました。

日本とロシヤが、海の向こうでたたかいはじめていました。海蔵さんは海をわたって、そのたたかいの中にはいつて行くのでありません。

七

ついに海蔵さんは、帰って来ませんでした。勇ましく日露戦争の花と散ったのです。しかし、海蔵さんのしのこした仕事は、いまでも生きています。椿の木かげに清水はいまもこんこんと湧き、道につかれた人々は、のどをうるおして元気をとり

もどし、また道^{みち}をすすんで行くのであります。

青空文庫情報

底本：「少年少女日本文学館第十五巻　ごんぎつね・夕鶴」講談社

1986（昭和61）年4月18日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第13刷発行

入力：田浦亜矢子

校正：もりみつじゅんじ

1999年10月25日公開

2009年1月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

牛をつないだ樁の木

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>